結果のまとめ

日常生活:よく遊びにいくところは、「友達の家」以外では、女子はカラオケ、ファーストフード店、男子ではコンビニ、ゲームセンターであった。カラオケ・コンビニをベースとした予防啓発の可能性が示唆された。
エイズ/性感染症(STD)・ピル関連知識:エイズの一般的な感染経路に関する知識は普及していたが、オーラルセックスによる性感染症感染リスクや性感染症の症状、性感染症と HIV の相互作用など性感染症に関する知識が不足していた。また、経口避妊薬(ピル)がエイズの予防にならないという基本的な知識の欠落が生徒の半数以上に見られた。
性感染症/妊娠に対する意識:友達とは、性感染症よりも妊娠の話題が多く、性感染症に対する危機意識の低さが示された。
性行動:性交経験率は約 3 割で、東京都や他県の高校生とほぼ同程度であり、高校生の性行動には都会と地方の差がないことが示された。また、性交経験者における、セックスの相手の数を調べると、これまでの相手の数が一人の生徒は男女とも半数を切っており、さらにこれまでの相手が 4 人以上の生徒が男女とも約 2 割存在し、セクシャルネットワークの広がりが示唆された。
コンドーム使用状況:コンドームの常時使用率は約 2 割に留まり、他県に比べ低い。また、相手の数が多い生徒ほどコンドーム使用率が低く無防備な性行動をとっていることが示された。この傾向は他県・都会・大学生でも観察され、若者に共通した傾向であると考えられる。
予防教育への要望:性感染症/エイズに関する一般論としての情報の提供ではなく、生徒達が自分達のリスクとして捉えられるような具体的な情報への要望が高いことが示された。また情報の内容だけでなく、教える側の姿勢(態度)も重要であることが示された。

結論:これまで、性感染症/エイズは都会だけの問題と捉えられる傾向にあったが、今回の調査から、地方でも活発な性行動がとられており、逆に都会よりも危機意識が低く、無防備であることが明らかとなった。したがって、地方の若者に対する早急な予防対策(教育)が緊要の課題であると考えられる。

研究 ①-2 地方の高校生の日常生活・性意識・性行動に関する調査

ー報告2:B 県調査結果ー

代表研究者：	木原　雅子	広島大学医学部公衆衛生学講座
班　　員：	木原　正博	京都大学大学院医学研究科国際保健学
	伊藤　智子	広島大学医学部公衆衛生学講座
	山崎　浩司	京都大学大学院人間・環境学研究科
	荒木　善光	京都大学大学院医学研究科国際保健学
	本間　隆之	京都大学大学院医学研究科国際保健学
研究協力者	田村　暁子	広島大学医学部公衆衛生学講座

研究の背景

1990 年代以降、わが国の若者の間でエイズや性感染症が蔓延し始めており、10 代の人工妊娠中絶率も急速に増加している。地方 B 県も例外ではなく、10 代（15－19 歳）の人工妊娠中絶率が 1996 年以降上昇を始め、また同県の15－19歳のクラミジア感染者数も1997年以降は増加を始めるなど、地方 B 県の若者の性をめぐる状況も憂慮すべき現状にある。こうしたことから、地方 B 県の若者に対する効果的なエイズ／性感染症予防対策の確立と実施は緊要の課題であるが、そのための基礎として、地方 A 県の若者の性行動やライフスタイルの把握は不可欠であると考えられる。

本調査（高校生エイズ予防のための基礎調査）は、こうした認識に基づいて実施されたものであり、高校生 2 年生を対象として、日常生活、エイズ・性感染症・避妊に関する知識のレベル、性意識、リスク行動の程度、コンドーム使用状況等の実態を把握することを目的とした。

本報告は、単純分析を中心とした集計結果をまとめたものである。

研究方法

【調査の実施時期】:2001 年 10 月－12 月

【対象】：地方 B 県全域のすべての高等学校を対象とした（注：今後の予防介入時の motivation を向上させるために、ランダムサンプリングは行わず、悉皆調査とした）。〔B 県に所在地を置く国公私立の全ての全日制高等学校 124 校（分校は含めるが定時制高校・養護学校は除く）（トーク社発行「B 県の学校」）に調査を依頼した。〕対象校においては、高校 2 年生男女を対象とした。一部学校によっては、他学年の追加参加も可能とした。

【調査の手順】：

（1）　地方 B 県の全養護教諭・保健主事を対象に、若者の性行動の現状および早急な予防教育の必要性を伝える講演会を実施した。（平成 13 年 6 月）

（2）　講演会に参加した養護教諭全員に調査実施可能性（feasibility）を尋ねる予備調査を行った。（平成 13 年 6－8 月）

（3）　県内の全ての養護教諭に郵送で調査を依頼した。（平成 13 年 9 月）
参加可能性の質問をし、参加可能校という返答をもらえなかった学校には再度、FAX で調査の重要性を説明し参加を促した。また、検討中の学校に対しては、個別に電話にて調査の重要性および詳細な説明を行い、回収率の向上につとめた。

【調査方法】:学校における集団調査（試験と同じ要領で、回りの人の回答を見ないように指示）。無記名自記式アンケート調査。

＊対象者に対する倫理的配慮：調査は、無記名でありどうしても答えたくない場合は無理に答える必要はないこと（白紙での提出可）や、調査の途中で止めたい場合には申し出て中断して良いことを、あらかじめ調査票に記載し、施行する学校側にも文書で伝えた。記入の終わ

った調査票は、高校生自身で添付のシールで封をし、学校関係者も内容の点検を行わず学校単位で返送した。

【質問票】

A県で高校生の性行動の実態を調査するために開発した質問票（MKBQ−highs）基に、B県の状況、親子のコミュニケーション、セックスにおける自己主張（sexual assertion）、性情報への暴露状況に関する質問を追加し、高校生用の新たな質問票（MKBQ-high-2-s）を開発した。質問票は自記式で15ページ、回答時間約20分、主質問40+付問18問であった（資料2）。

【調査項目】

①属性（性別、年齢、学年）

②家庭環境

- 家族構成
- 親との会話の頻度
- 会話の相手
- 会話所要時間
- 家庭のしつけの厳格さ（服装に関して）
- 家庭のしつけの厳格さ（交際に関して）

③日常生活

- 学校での部活
- 通学手段
- よく遊びに行く場所
- 帰宅時間
- 外泊回数
- 通信手段
- 親からのお小遣いの額
- アルバイトの有無
- 各種経験（リップクリーム・マユ・マニキュア・化粧・ピアス・パーマ・毛染め・エステ・いれずみ・たばこ・酒・薬物・テレクラ・援助交際）

④STD/HIV関連知識

・STD/HIV基礎知識の質問

- セックスについていつ知ったか
- 誰から（何から）知ったか
- エッチマンガの経験・最初はいつ・頻度
- エッチ雑誌の経験・最初はいつ・頻度
- AVの経験・最初はいつ・頻度
- メディアの性的描写をどう思うか

- クラスメートの性交経験率の予測値
- 友達のコンドーム使用率
- つきあっている人がいるか（相手はどういう人か・どこで知り合ったか・親は知っているか）

⑤性行動

- セックスの経験の有無
- はじめてはいつ
- これまでの相手の総数

- コンドーム使用状況
- コンドーム使用目的
- 一番最近のセックス時のコンドーム使用率
- コンドームを持っていたのは誰？
- 使おうと言ったのは誰？

⑥コンドームに対する態度

- コンドーム使用に対する態度（intention）
- コンドームはどのように手に入れるか
- セックスしたくないとき断れるか
- コンドーム使用を促せるか
- 新しい相手にコンドーム使用を促せるか
- 嫌がる相手にコンドーム使用を促せるか
- 女性がコンドーム使用をすすめることはどう思う？
- 男性がコンドーム使用をすすめることはどう思う？

⑦性に関するコミュニケーション

- 妊娠・性病・エイズについて話すか

⑧若者の性行為の認容度

- 高校生のセックスを認めるか
- 中学生のセックスを認めるか

⑨セルフエスティーム

⑩性教育

- 学校での性教育はどのような授業形態だったか？
- 高校卒業までに知りたいことは？
- 学校の先生に教えて欲しい内容は？
- 家庭で教えて欲しい内容は？
- 専門家から習いたい内容は？
- 学校で習ったことは？
- 家庭で習ったことは？
- 専門家から習ったことは？
- 教えてもらう必要がないものは？

⑪性教育の仕方（教え方）

⑫感想

結果：全参加校は38校（全体参加率30.6%：38/124校）（公立校参加率31.1%：28/90校、私立参加率29.4%：10/34校）であり、公立校・私立校による参加率の違いはなかった。また、参加校における調査参加者総数は、6839名（回収率95.7%：6839/7143名）で、男女の内訳は、男子3727名（54.5%）、女子3038名（44.4%）、性別無記入74名であった。また、学年別では、1年生198名、2年生6193名、3年生323名、学年無記入125名であった。
本報告は、高校2年生男女（6188名）を対象とし、高2男子3340名、高2女子2848名であった。

調査結果

1. 高校生の日常生活

(1)遊び場

表1によく遊びにいくところを示した。男子生徒では、男友達の家 (46.9%)、コンビニ (33.2%)、カラオケ (27.9%)、ゲームセンター (24.6%) の順であったが、女子生徒では、カラオケ (48.3%)、女友達の家 (38.8%)、繁華街 (33.6%)、ファーストフード店 (33.3%)、コンビニ (26.1%) の順であった。男女とも、同性の友達の家以外では、カラオケ・コンビニによく行くことが示された。B 県の結果は、割合こそ多少異なるものの、A 県の結果とほぼ同様の傾向を示した。

表1．よく遊びにいくところ（複数回答）

	高2男子		高2女子	
	人数		人数	
遊び場所	3340	%	2848	%
カラオケ	933	27.9	1376	48.3
映画館	435	13.0	671	23.6
ゲームセンター	823	24.6	546	19.2
ファーストフード店	554	16.6	947	33.3
繁華街	598	17.9	957	33.6
彼氏や彼女の家	250	7.5	417	14.6
男友達の家	1568	46.9	103	3.6
女友達の家	105	3.1	1105	38.8
公園	412	12.3	285	10.0
コンビニ	1109	33.2	744	26.1
わからない	214	6.4	146	5.1
その他	288	8.6	276	9.7
遊びに行かない	410	12.3	227	8.0
不明	203	6.1	51	1.8

(2)通信手段

B 県高校生の通信手段はメール機能付携帯電話が最も多く、男子生徒の 62.5%、女子生徒の 75.9%が所持していた。パソコン持っている割合は、男女とも 34-36%であり、これは A 県より 10%以上高率であった。

表2．高校生の通信手段（複数回答）

	高2男子		高2女子	
	n=3340	%	n=2848	%
メール付携帯電話	2087	62.5	2161	75.9
メールなし携帯電話	74	2.2	11	0.4
PHS	90	2.7	88	3.1
ポケベル	12	0.4	3	0.1
パソコン	1194	35.7	979	34.4
どれも持っていない	379	11.3	193	6.8
無記入	291	8.7	198	7.0

(3)飲酒、喫煙、薬物、テレクラ、援助交際の経験率

飲酒・喫煙：表3に、B 県高校 2 年生の各種経験の割合を示した。喫煙経験は男子生徒の 4 割、女子の 3 割に見られ、飲酒は男女とも約 8 割が経験していた。ただし、この経験率には、吸ったことがある、飲んだことがあるという 1 回だけの経験者も含まれるため、さらに、詳しい追加質問をした結果、毎日喫煙者が男子生徒の 10.8%、女子生徒の 4.4%に見られ、また、毎週お酒を飲んでいる生徒が、男子の 5.3%、女子の 2.5%に見られた。
薬物：ラッシュ・スピード・エクスタシーなどの薬物の経験を尋ねた。経験者は男子生徒の 3.7%、女子生徒の 0.7 と少数ではあるが存在した。
テレクラ・援助交際：一方、テレクラ利用率は男子生徒で 4.8%、女子生徒では 6.2%であり、援助交際経験率は男女とも約 2 %存在した。

表 3．各種経験率

	高2男子 n=3340	%	高2女子 n=2848	%
タバコ	1311	39.3	707	24.8
酒	2688	80.5	2200	77.2
薬物	123	3.7	20	0.7
テレクラ	159	4.8	176	6.2
援助交際	79	2.4	64	2.2

(4)セックス情報

● **セックスについていつ知ったのか？**

表 4 に、子ども達が「いつセックスについて知ったのか」の結果を示す。知った割合が最も多かった学年は、男子生徒では中学 1 年生、女子生徒では小学 5 年生であった。小学校までにセックスについて知った生徒の割合は、男子では 54.0%、女子では 66.9%であり、小学校時代に 5-7 割の生徒達がセックスについて知っていることが示された。

表 4．セックスについて知ったのはいつ？

合計	高2男子 n=3340	%	高2女子 n=2848	%
小学1年生	95	2.8	99	3.5
小学2年生	121	3.6	110	3.9
小学3年生	193	5.8	294	10.3
小学4年生	288	8.6	424	14.9
小学5年生	568	17.0	598	21.0
小学6年生	537	16.1	379	13.3
中学1年生	832	24.9	381	13.4
中学2年生	368	11.0	152	5.3
中学3年生	70	2.1	26	0.9
高校1年生	31	0.9	10	0.4
高校2年生	58	1.7	10	0.4
無記入	179	5.4	365	12.8

● はじめてセックスについて知ったのは誰(何)から?

表5にはじめてセックスに誰（何）から知ったのかを示す。男子生徒では、同性の友達（52%）が圧倒的に多く、マンガ・コミック（17%）、雑誌・週刊誌（17%）、保健体育の先生（17%）、テレビドラマ（12%）の順であった。一方、女子生徒でも、最も多いのは同性の友達（35%）で、次がテレビドラマ（26%）、保健体育の先生（24%）、マンガ・コミック（20%）の順であった。

表5．はじめてセックスについて知ったのは誰（何）からでしたか？（複数回答）

	高2男子 n=3340	%	高2女子 n=2848	%
男の友達	1719	51.5	350	12.3
女の友達	209	6.3	982	34.5
彼氏や彼女	54	1.6	34	1.2
中高校の養護の先生	140	4.2	340	11.9
中高校の保健体育の先生	560	16.8	669	23.5
中高校の家庭科の先生	55	1.6	77	2.7
医師・看護婦・研究者など専門家	12	0.4	17	0.6
兄	45	1.3	22	0.8
姉	12	0.4	29	1.0
父	60	1.8	63	2.2
母	75	2.2	159	5.6
親戚の人	36	1.1	17	0.6
テレビのニュース	97	2.9	84	2.9
テレビのドラマ	407	12.2	737	25.9
テレビの特集番組	188	5.6	112	3.9
アダルトビデオ	327	9.8	69	2.4
新聞	43	1.3	12	0.4
雑誌・週刊誌	561	16.8	356	12.5
マンガ・コミック	570	17.1	566	19.9
専門書	63	1.9	22	0.8
その他	217	6.5	285	10
特にない	223	6.7	219	7.7
無記入	214	6.4	180	6.3

●小学校時代の性メディアへの暴露状況

表6に、小学校時代の性メディアへの暴露状況を示す。小学校での「性描写のあるマンガ」への暴露は男子35%、女子27%と約3割であった。「性描写のある雑誌」は、男子生徒の30%、女子生徒の18%で、「アダルトビデオ」は、男子生徒の15%、女子生徒の6%が小学校時代に既に暴露されていた。

表6．小学時代の性メディアへの暴露率

	高2男子 n=3340	%	高2女子 n=2848	%
エッチマンガ	1182	35.4	766	26.9
エッチ雑誌	995	29.8	520	18.3
アダルトビデオ	490	14.7	158	5.5

●現在の性メディアの利用割合と利用頻度

B県高校2年生の現在の性メディアの利用割合と利用頻度は、「性描写のあるマンガ」の利用者は男子の45.3%で、利用頻度は月3.9±18.9回、女子では15%が利用し頻度は月0.6±2.3回、「性描写のある雑誌」は男子の44.3%が利用し、頻度は月4.3±21.5回、女子では7.1%が利用し頻度は月0.3±2.2回、「アダルトビデオ」の場合は、男子の31.3%が利用し、頻度は月2.1±6.5回、女子の利用者は2.9%で、頻度は月0.4±4.3回であった。

(5)交際状況

B 県高校 2 年生の交際状況を表 7 に示した。交際経験（現在+過去）を有する生徒は男子の 51.1%、女子の 61.5%と生徒の 5-6 割であった。

表 7．現在付き合っている人がいますか

	高2男子 n=3340	%	高2女子 n=2848	%
今まで, 付き合ったことがない	1411	42.2	979	34.4
以前はいたが, 今はいない	1124	33.7	1037	36.4
現在つきあっている人がいる	581	17.4	714	25.1
無記入	224	6.7	118	4.1

次に現在つきあっている人がいる生徒に相手がどのような人か（表 8）、相手とどのようにして知り合ったのか（表 9）、つきあっている相手を親に紹介したか（表 10）質問した。

つきあっている相手は誰か：男子の 9 割、女子の 7 割は同じ高校生であったが、大学生・社会人とつきあっている生徒が男子の 5%、女子の 2 割存在した。

どのようにしてつきあったか：男女とも最も多いのが学校で知り合った（48%、44%）、同性・異性の友達の紹介で知り合ったという回答が次に多かった。

親につきあっている人を紹介しているか：男子の 40%、女子の 45%が親に紹介しており、紹介していないが親は知っているという生徒をあわせると男女とも約 8 割の生徒の親が子どもが交際していることを知っているということが示された。

表8. つきあっている相手はどういう人か

	高2男子 n=581	%	高2女子 n=714	%
中学生以下	24	4.1	3	0.4
高校生	505	86.9	495	69.3
フリーター	8	1.4	40	5.6
大学生	15	2.6	51	7.1
社会人	12	2.1	92	12.9
その他	8	1.4	16	2.2
無記入	9	1.5	17	2.4

表 9．相手とどのように知り合ったか

	高2男子 n=581	%	高2女子 n=714	%
男友達の紹介	83	14.3	75	10.5
女友達の紹介	70	12.0	112	15.7
学校	280	48.2	312	43.7
バイト先, 職場	17	2.9	35	4.9
塾, 予備校	8	1.4	13	1.8
メル友	31	5.3	54	7.6
兄弟姉妹や親族の紹介	4	0.7	7	1.0
ナンパ	10	1.7	14	2.0
合コン	11	1.9	12	1.7
居酒屋	4	0.7	1	0.1
その他	50	8.6	53	7.4
無記入	13	2.2	26	3.6

表10. つき合っている人を親は知っているか

	高2男子 n=581	%	高2女子 n=714	%
親に紹介した	231	39.8	318	44.5
紹介はしていないが知っている	244	42.0	262	36.7
知らせていない	97	16.7	115	16.1
無記入	9	1.5	19	2.7

2. 性行動

(1)性交経験率

B 県の高校 2 年生の性交経験率は、男子 19.6% (654/3340 名)、女子 26.3% (749/2848 名) であり、男子は A 県よりもやや低率であったが、女子はほとんど同率であった。

(2)これまでのセックスの相手の総数

性交経験を有する生徒に、これまでの相手の総数を尋ねた。表 11 にこれまでの相手の累積数を示す。それによると、男女とも、これまでの相手が 1 人だけの生徒は既に半数を切っており、4 人以上の相手を有する生徒が男女とも約 2 割存在した。

表11. これまでのｾｯｸｽの相手の数

	高2男子 n=654	%	高2女子 n=749	%
1人	323	49.4	331	44.2
2人	128	19.6	157	21.0
3人	55	8.4	84	11.2
4人	43	6.6	48	6.4
5人以上	85	13.0	104	13.9
無記入	20	3.1	25	3.3

(3)コンドーム使用状況

B 県高校 2 年生のコンドーム使用状況を表 12 に示す。コンドーム常時使用者は男子の 27%、女子の 26%に留まり、男子 55.7%、女子 62.3%と約 6 割はコンドームを使ったり使わなかったりと不完全な使用状況であった。

表12. ｺﾝﾄﾞｰﾑ使用状況

	高2男子 n=654	%	高2女子 n=749	%
一度も使用したことがない	105	16.1	80	10.7
使用しないほうが多い	104	15.9	167	22.3
使用したりしなかったり半々	109	16.7	156	20.8
使用するほうが多い	151	23.1	144	19.2
毎回使用する	178	27.2	195	26.0
無記入	7	1.1	7	0.9

(4)コンドームの使用目的

コンドームの使用目的を表 13 に示す。男女とも 9 割以上が避妊を目的としており、エイズ予防を目的としていたのは男子生徒の 37%、女子の 30%、性感染症予防は男子 40%、女子 35%に留まった。

表13. ｺﾝﾄﾞｰﾑの使用目的

	高2男子 n=654	%	高2女子 n=749	%
避妊	605	92.5	724	96.7
エイズ予防	239	36.5	221	29.5
性病予防	261	39.9	265	35.4
その他	8	1.2	8	1.1
無記入	17	2.6	10	1.3

(5)相手の数とコンドーム使用率との関係

セックスの相手の数とコンドーム使用率（常用率）との関係を表 14 に示した。それによると相手の数が多くなるにつれてコンドーム使用率が低くなることが示され、相手の多い人では無防備な性行動をとっている可能性が示唆された。

表14. 相手の数とコンドーム常時使用率との関係

これまでの相手の数	男子 n=654	女子 n=749
1人	40.9	37.2
2人	15.6	28.7
3人	18.2	15.5
4人以上	11.7	6.6

(6)一番最近のセックス時のコンドーム使用状況

表 15 に一番最近のセックス時のコンドーム使用率を示す。一番最近のセックスでは、男子生徒の53%、女子生徒の 55%がコンドームを使用していた。

表15. 一番最近のｾｯｸｽ時ｺﾝﾄﾞｰﾑの使用

	高2男子 n=654	%	高2女子 n=749	%
使った	346	52.9	415	55.4
使わなかった	252	38.5	285	38.1
わからない	34	5.2	30	4.0
無記入	22	3.4	19	2.5

●その時コンドームを持っていたのは誰か？

一番最近のセックス時にコンドームを使用した生徒にコンドームを持っていたのは誰であったかを尋ねた（表 16)。男子では 83%が自分で持っていたのに対し、女子で自分で持っていた生徒は 12%であり、相手まかせな女子生徒の姿勢が示唆された。

●コンドームを使おうと言ったのは誰か？

一番最近のセックス時にコンドームを使用した生徒に対し、誰がコンドーム使用を促したかを質問した（表 17)。自分から促したのは男子の 34%、女子の 16%であり、さらに両方で使おうと言ったのをあわせると、男子の 83%がコンドーム使用を薦めたのに対し、女子では 72%であり、女子の方がコンドーム使用に消極的な傾向が示唆された。

表16. その時ｺﾝﾄﾞｰﾑを持っていたのは誰ですか？

	高2男子 n=346	%	高2女子 n=415	%
自分	286	82.7	51	12.3
相手	45	13.0	333	80.2
その場にあった	11	3.2	29	7.0
不明	4	1.2	2	0.5

表17. ｺﾝﾄﾞｰﾑを使うと言ったのは誰ですか？

	高2男子 n=346	%	高2女子 n=415	%
自分	119	34.4	66	15.9
相手	26	7.5	87	21.0
両方	167	48.3	234	56.4
どちらか忘れた	32	9.2	24	5.8
不明	2	0.6	4	1.0

(7)セックスに対する自己主張

セックスの様々場面において自分の意志を主張できるかを調べた。「セックスしたくないときに拒否できるか」（表19）では、男子の46%、女子の69%拒否できると答えていた。「コンドームをつけようと言えるか」（表20）では、男子の70%、女子の76%が言えると回答した。さらに「新しい相手にコンドームをつけようと言えるか」（表21）では男子の69%,女子の62%が言えると答えている。「相手が嫌がってもコンドームをつけようと言えるか」（表21）の場合でさえ、男子の50%、女子の54%が言えると答えていた。このように、高校生達は、各種場面において、自己主張できると答えているが、実際のコンドーム使用は不完全な状況である。単純な解釈はできないが、コンドーム使用率の低さの背景にはネゴシエーションスキルの不足よりも、男女とも使う意志がない（必要性を感じていない）可能性も考えられ、今後のさらなる調査の必要性が示唆された。

表19. ｾｯｸｽを拒否できるか

	男子 n=654	%	女子 n=749	%
絶対言えないと思う	95	14.5	9	1.2
言える自信はあまりない	100	15.3	94	12.6
言えるかもしれない	90	13.8	97	13.0
言える	177	27.1	274	36.6
絶対言える	122	18.7	246	32.8
そのようなことが想像できない	42	6.4	8	1.1
無記入	28	4.3	21	2.8

表20. ｺﾝﾄﾞｰﾑをつけようと言えるか

	男子 n=654	%	女子 n=749	%
絶対言えないと思う	35	5.4	14	1.9
言える自信はあまりない	42	6.4	58	7.7
言えるかもしれない	67	10.2	83	11.1
言える	224	34.3	264	35.2
絶対言える	144	22.0	308	41.1
だまってｺﾝﾄﾞｰﾑをつける	89	13.6	9	1.2
そのようなことが想像できない	30	4.6	5	0.7
無記入	23	3.5	8	1.1

表21. 新しい相手にｺﾝﾄﾞｰﾑをつけようと言えるか

	男子 n=654	%	女子 n=749	%
絶対言えないと思う	43	6.6	29	3.9
言える自信はあまりない	47	7.2	97	13.0
言えるかもしれない	71	10.9	130	17.4
言える	235	35.9	241	32.2
絶対言える	128	19.6	224	29.9
だまってｺﾝﾄﾞｰﾑをつける	87	13.3	3	0.4
そのようなことが想像できない	30	4.6	13	1.7
無記入	13	2.0	12	1.6

表22. 相手が嫌がってもｺﾝつけようと言えるか

	男子 n=654	%	女子 n=749	%
絶対言えないと思う	85	13.0	42	5.6
言える自信はあまりない	114	17.4	168	22.4
言えるかもしれない	85	13.0	111	14.8
言える	180	27.5	206	27.5
絶対言える	99	15.1	191	25.5
だまってｺﾝﾄﾞｰﾑをつける	45	6.9	9	1.2
そのようなことが想像できない	29	4.4	11	1.5
無記入	17	2.6	11	1.5

3. 性に関するコミュニケーション

表 23 に誰と性関連の話をするかを示した。妊娠・性感染症・エイズ、すべてのトピックにおいて女子の方が男子より話をしていた。話の相手としては男女とも友人が最も多かった。

表23. 話したことがある人の割合

	妊娠		性感染症		エイズ	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
話の相手	n=3340	n=2848	n=3340	n=2848	n=3340	n=2848
彼氏・彼女	18.6	29.2	9.5	13.1	8.4	7.8
友人	39.4	73.7	34.4	43.2	27.1	41.6
家族	18.7	44.5	10.2	19.1	17.0	30.1
学校の先生	18.2	26.9	19.1	22.6	21.8	27.6

4. 性教育についての生徒からの要望

高校生からの性関連の予防教育に関する要望は、最も多かったのが、「危ないことは危ないと教えて欲しい」という要望で、男子の8割、女子の9割が望んでいた。「教える場合は堂々と教えて欲しい」「ふざけ半分な教え方はよくない」「すぐに役立つ情報が欲しい」「身近に感じられる話を聞きたい」が5-8 割の生徒からの要望であった。生徒達が性の問題を正面から現実を踏まえてまじめに取り上げて欲しいと思っていることが示唆された。

表24. 教育に対する要望（望んでいる人の割合）

	男子	女子
	n=3340	n=2848
教える場合は堂々と教えて欲しい	74.7	83.7
おもしろおかしく本当のことを教えて欲しい	32.8	25.2
ふざけ半分な言い方はして欲しくない	60.6	75.3
危ないことは危ないと教えて欲しい	79.5	91.4
男子と女子は分けて教えて欲しい	21.6	27.0
性のことだけとりあげて話をしないで欲しい	27.5	29.7
コンドームの正しい司法方法を教えて欲しい	49.0	52.9
専門家の話を聞きたい	38.6	49.4
熱心な人の話を聞きたい	33.4	36.9
教える人自身の話や友達の話など、身近に感じられる話を聞きたい	50.2	64.7
性病やエイズが心配になったとき、相談できる相手や連絡先などすぐに役立つ情報が欲しい	54.9	69.5
何度も繰り返し教えて欲しい	19.6	19.5
小学校低学年から教えて欲しい	20.9	17.8

結果のまとめ

日常生活:よく遊びにいくところは、「友達の家」以外では、女子はカラオケ、繁華街、ファーストフード店、コンビニ、男子ではコンビニ、カラオケ、ゲームセンターであった。男女ともカラオケ・コンビニの利用が多いことからカラオケ・コンビニをベースとした予防啓発の可能性が示唆された。

各種経験:テレクラ利用者はB県高校生男女の5-6%であった。

セックスのことを知った時期:小学校時代にすでに5-7割の生徒がセックスについて知っていた。

セックス情報への暴露状況:小学生のうちにすでに男女とも 3 割近くが性メディアに暴露されていた。

交際相手:交際相手は7-9割は同じ高校生であるが、女子の2割は大学生や社会人と交際しており、年代を超えたネットワークの広がりが示唆された。

性行動:性交経験率は約 3 割で、東京都や他県の高校生とほぼ同程度であり、高校生の性行動に

は都会と地方の差がないことが示された。また、性交経験者における、セックスの相手の数を調べると、これまでの相手の数が一人の生徒は男女とも半数を切っており、さらにこれまでの相手が 4 人以上の生徒が男女とも約 2 割存在し、セクシャルネットワークの広がりが示唆された。

コンドーム使用状況:コンドームの常時使用率は約3割に留まった。また、相手の数が多い生徒ほどコンドーム使用率が低く無防備な性行動をとっていることが示された。この傾向は他県・都会・大学生でも観察され、若者に共通した傾向であると考えられる。また、コンドーム使用における女子の相手まかせな姿勢が観察された。

性感染症/妊娠/エイズに対する意識:男女では男子生徒のほうが性感染症・エイズ・妊娠が話題に上ることが少なく危機意識が低い可能性が示唆された。またこれらの話題の話相手は友達が主であることから、友達のコミュニケーションチャネルを用いた予防情報伝達の可能性が示唆された。

予防教育への要望:性感染症/エイズに関する一般論としての情報の提供ではなく、生徒達が自分達のリスクとして捉えられるような具体的な情報への要望が高いことが示された。また情報の内容だけでなく、教える側の姿勢(態度)も重要であることが示された。

結論:以上の結果より、地方でも活発で無防備な性行動がとられていることが明らかとなった。したがって、地方の若者に対する早急な予防対策(教育)が緊要の課題であると考えられる。

研究 ② 都会の若者に対するクラブイベント調査

研究代表者：木原　雅子　広島大学大学院医歯薬学総合研究科病態情報医科学
研　究　者：木原　正博　京都大学大学院医学研究科国際保健学
小松　隆一　国立社会保障人口問題研究所
市川　誠一　神奈川県立衛生短期大学衛生技術科
大屋　日登美　神奈川県立衛生短期大学衛生技術科
内野　英幸　長野県大町保健所
啓発事業担当者：水野　哲弘　横浜市衛生局感染症・難病対策課
（研究協力）　小黒　大治　横浜市衛生局保健部・難病対策課
神山　幸恵　横浜 AIDS 市民活動センター
露木　和徳　横浜市衛生研究所
中澤　佐代子　横浜市衛生研究所
南口　敦子　横浜市衛生研究所

研究の背景：近年、10-20 代の若者を中心に HIV や性器クラミジア感染症および淋菌感染症が急速に増加を始め、また、10 代における人工妊娠中絶率も近年増加傾向を示している。このような状況の中、若者の性行動の実態を知るために、本研究グループでは、若者集団に対し多様な角度からの調査を実施している。その中で、都会の若者に関しては、昨年度、首都圏の 10 代女性の質的調査と首都圏繁華街 10 代カップル調査を実施した。②の調査結果より、首都圏繁華街の 10 代カップルの「よく遊びに行くところ」の 1 つに“クラブ”（注：踊れて飲酒できる店。以前のディスコに類似したもの）が登場し（男子 6.0%、女子 5.3%）、①の首都圏 10 代女性のインタビュー調査からは、彼女達の生活の中に占める“クラブ”の存在の大きさが示されていた。しかしながら、これまで、“クラブ”に集まる若者に関しての調査は存在しない。そこで、今回、首都圏 Z 市の“クラブ”に集まる若者の性意識・性行動および実際の性感染症の感染状況を調べ、今後の予防介入の際の基礎情報を収集する目的で、Z 市保健行政担当者、Z 市エイズ関連 NGO が、“クラブ”オーナーの協力を得て実施したエイズ予防啓発活動に、我々研究班が参加協力し本調査を実施した。

研究方法

調査時期：2001 年 8 月 17 日-18 日（2 日間）

調査場所：Z 市内の“クラブ Y”

調査方法：調査期間内に“クラブ Y”を訪れた来場者全員にアンケート及び性感染症検査を呼びかけた。

(1)アンケート調査

- “クラブ Y”入り口で入場者全員アンケート調査の依頼し、参加者はクラブ 2F アンケート記入室で記入してもらった。記入後、謝礼を手渡した。
- アンケートは、場所柄を考慮し、短いものとし、できるだけ場の雰囲気に合わせるようデザインを工夫した。
- 質問総数は主質問 19 問+付問 2 問であった。
- 質問項目

問 1．この“クラブ”を何で知ったか？
問 2．当“クラブ”への来訪頻度
問 3．他の“クラブ”への参加頻度

問４．　年齢
問５．　性別
問６．　職業
問７．　Z 市在住か市外者か
問８．　STD/HIV 関連知識
　✧　正解は会場で配布された携帯ストラップのメールアドレスにアクセスするとわかる。
問９．　STD および HIV リスク認知
問１０．　過去 1 年間の STD 既往歴
問１１．　過去 1 年間のエイズ検査経験
問１２．　セックスの経験の有無
問１３．　これまでの相手の総数
問１４．　過去 1 年間の相手の総数
　付１．過去 1 年間のコンドーム使用状況
　付２．コンドーム使用意図
問１５．　一番最近のセックス時のコンドーム使用状況
問１６．　STD/HIV 関連で欲しい情報
問１７．　「世界エイズデー」を知っているか
問１８．　「レッドリボン」を知っているか
問１９．　当 NGO を知っているか

(2)クラミジア抗原検査

アンケートと同じく、入場者全員に入り口で検査を依頼。検査希望者は当“クラブ”内に設けられた部屋で、検査キットを受け取り、検体をトイレで自己採取（男性：尿、女性：膣スメア〔自分で tampon 挿入と同様に swab を膣内に挿入して採取〕）し、提出。女性の尿検体では検査の感度落ちるため、膣スメア法を採用した。Chlamydia tracomatis 検査は PCR（Polymerase Chain Reaction）法によるアンプリコア®-クラミジアキット（日本ロシュ社）を使用した。
検査結果は、8 月 27 日（月）-29 日（水）16：00-20：00 に Z 市エイズ NGO 施設内で医師立会いのもと、検査申し込み用紙と引き換えに、本人であるかどうか確認の上通知した。

調査/検査体制フローチャート

(1)入り口

・ クラブ入場者の人数を性別にカウントする
・ スタッフが入場者に直接、参加依頼のチラシを配る

(2)フロア

・ DJ に、定期的にアンケートおよび検査への参加依頼の声かけをしてもらう

★参加依頼の声かけマニュアル

＊注意:17 日と 18 日では謝礼が異なっているので間違えないように注意すること

8 月 17 日(金)

「アンケートや検査に参加すると**記念品**がもらえるよ。」
「その上、普通、病院で 4000 円かかる検査が今日はただでできるよ。但し、人数に制限があって先着 100 名までだよ。」

8月18日(土)

「アンケートや検査に参加すると**無料ドリンク券**がもらえるよ。」

「その上、普通、病院で4000円かかる検査が今日はただでできるよ。但し、人数に制限があって先着100名までだよ。」

＊ 1日目と2日目で謝礼が異なっているのは、どちらの謝礼が効果的か検討するため。

＊ 検査人数に制限を加えているのは、測定のキャパシティーを考慮したため。

(3)アンケートの流れ

①アンケートの受け付け（注：検査申込み用紙には受付け番号が書いてある）

・アンケートを手渡すときに**検査の希望**を聞く

・検査希望者には、アンケート用紙と検査申し込み用紙を手渡し、その人の**受け付け番号をアンケート用紙の検査番号記入欄に記入する。**

②アンケートに記入

③アンケートの回収

・ 検査希望者の**受け付け番号がアンケート用紙に記入されているか**確認

④感謝の言葉と謝礼の手渡し(日によって謝礼の品が異なっているので注意)

・ 8月17日のアンケート参加者への謝礼：
ワンタッチコンドームパック（3個セット）

・ 8月18日のアンケート参加者への謝礼：
無料ドリンク券1枚

＊アンケートの正解に関する情報も伝える。

(4)検査の流れ

① **検査の受け付け**

・検査申込書を呈示してもらい、検体収集キットを渡す

・検体採取方法の説明書を手渡し、必要によっては採取方法を説明する

② **検体採取**

・各自トイレで検体を採取する

③ **検体の提出**

・受け付け番号がかかれているか確認する。

④ **感謝の言葉と謝礼の手渡し**

・ 8月17-18日の検査参加者への謝礼（2日間と同じ）：
NGOの袋入り予防グッズセット

結果：

クラブ入場者総数：調査期間中のクラブ入場者は1日目は923人（男性554人、女性369人)、2日目は875人（男性525人、女性350人）で、両日とも参加者の男女比は3：2で男性の方が多かった。

●自記式アンケート調査

参加者数(参加率)：調査期間中のアンケート参加者総数は 342 人（男性 169 人、女性 173 人）であった。

参加率：アンケート参加率は、1 日目は、男性 11.7%（65/554 人）、女性 16.3%（60/369 人）で、2 日目は、男性 19.8%（104/525 人）、女性 32.3%（113/350 人）であった。

本調査のアンケートの参加率は約 1-3 割と全般的に低かったが、2 日間で比較すると、2 日目の方が上昇していた。これは謝礼を前日のコンドームパックから無料ドリンク券にしたためと考えられる。また、男女では女性の方が参加率が高く、2 日目の参加率は 3 割を超えていた。

アンケート参加者の属性

表１．調査参加者の年齢分布

年齢	男性 n=169	女性 n=173
20歳未満	11.2	26.6
20-24歳	53.8	43.4
25-29歳	11.8	12.7
30-34歳	1.8	2.9
35歳以上	2.4	0.6
無記入	18.9	13.9

アンケート参加者の年齢分布を見ると、男女とも 20-24 歳の 20 代前半にピークが見られたが、男女を比べると、女性がやや若い方にシフトしていた。

表２．参加者の職業

	男性 n=169	女性 n=173
学生	20.1	27.2
会社員	26.6	22.5
フリーター	20.1	27.7
無職	2.4	3.5
その他	11.8	5.2
無回答	18.9	13.9

アンケート参加者の職業分布を見ると、男性では最も多かったのは、「会社員」で 2 番目が「学生」と「フリーター」であった。一方、女性では一番多かったのが、「フリーター」で次が「学生」であった。

また、表には示していないが、住所は「横浜市在住」が全体の 5-6 割を占めていた。

クラブ来場の動機

表３．クラブ来場の動機

	男性 n=169	女性 n=173
フライヤーで見た	13.0	16.8
雑誌を見た	4.1	4.0
偶然通りかかった	4.1	4.0
友達から聞いた	57.4	59.5
無回答	21.3	15.6

クラブ来場の動機は、男女とも「友達から聞いた」が最も多く、次が「フライヤーを見た」であった。

当クラブ来場頻度

表４．当クラブ来場頻度

	男性 n=169	女性 n=173
今回始めて	24.9	40.5
よく来る	30.2	19.7
あまり来ない	23.7	25.4
無回答	21.3	14.5

当クラブの来場頻度は、男性では、「よく来る」が最も多く、次が「今回始めて」であったが、女性では「今回はじめて」が約 4 割で最も多く、次が「あまり来ない」であった。

HIV/STD 関連知識の正解率

表５．HIV/STD関連知識の正解率

	男性 n=169	女性 n=173	国立大学生 n=13645
STDにかかっているとHIVにかかりやすい	32.5	34.1	28.2
オーラルセックスで口から性器にSTDがうつる	65.7	46.2	41.7
オーラルセックスで性器から口にSTDがうつる	67.5	60.1	62.7
STDにかかっても必ずしも症状は出ない	69.8	68.8	62.3
STDを治療しないと、不妊の原因になることがある	53.8	73.4	
HIV治療薬の進歩で、エイズの発症遅延が可能となった	63.9	63.0	
普通のエイズ検査では、感染後数日では判定できない	39.6	41.6	70.6
保健所では、無料匿名で検査を受けられる	52.7	49.7	57.9
ピルはエイズやSTDの予防にはならない	79.9	68.2	60.8
外だしでは、妊娠は防げない	85.8	80.9	
外だしでは、STDは防げない	86.4	85.5	
健康に見えても、HIVに感染していることがある	84.0	81.5	94.5

正解率が50%を切り、最も低かったのは、「STDとHIVの相互作用に関する質問」であった。次に正解率が低かったものは、HIV 検査に関するもので、検査のタイミングに関する質問と保健所の無料匿名 HIV 検査に関する質問であった。本集団の結果を国立大学生の調査結果と比較して見ると、半数を超える 5/8 問で、本集団の正解率の方が高かった。この結果より、本集団の HIV/STD 関連知識レベルは、それほど低いものではないと考えられる。

エイズのリスク認知

表６．エイズのリスク認知（感染の可能性）

	男性 n=169	女性 n=173
全くない	26.0	37.0
非常に低い	14.2	18.5
低い	16.0	15.0
中くらい	16.0	16.2
高い	4.7	1.7
非常に高い	4.7	1.7
わからない	12.4	6.4
無回答	5.9	3.5

アンケート参加者の HIV 感染のリスク認知は、「まったくない」と思っている人が最も多く、3-4 割であったが、特に女性で危険性を感じていない人が多かった。

HIV 検査歴：過去 1 年間の HIV 検査率は、男性の 4.7%（8/169 人）、女性の 4.6%（8/173 人）であった。

STD リスク認知

表７．STDのリスク認知（感染の可能性）

	男性 n=169	女性 n=173
全くない	21.9	23.7
非常に低い	15.4	19.1
低い	12.4	14.5
中くらい	22.5	22.5
高い	6.5	8.7
非常に高い	5.9	3.5
わからない	10.1	5.8
無回答	5.3	2.3

一方、STD のリスク認知に関しては、男性では、STD 感染リスクは「中くらい」が 23%、「全くない」が 22%であったが、女性では、「まったくない」が 24%で最も多く次に「中くらい」23%であった。

STD 検査歴：過去 1 年間の STD 検査率は、男性の 9.5%（12/169 人）、女性の 15.6%（27/173 人）であった。

性経験率：男性の 97.0%（164/169 人）、女性の 91.3%（158/173 人）がセックスの経験を有していた。

セックスの相手の数

表８．これまでの相手の総数（セックス経験者）

	男性 n=164	女性 n=158
1人	16.5	23.4
2人	3.0	3.2
3人	3.7	11.4
4人	2.4	11.4
5人以上	74.4	50.6

これまでの相手総数が 1 人の人の割合は、男性の 17%、女性の 23%と極めて少なく、男性の 74%、女性の 51%は既に 5 人以上の相手を持っていた。（＊：これまで我々が集めた若者集団に関するデータの中では最も相手の数が多い。）

表９．過去1年間の相手の数（セックス経験者）

	男性 n=164	女性 n=158
1人	22.0	29.1
2人	12.2	17.7
3人	18.3	15.2
4人	5.5	3.8
5人以上	24.4	15.8
不明	17.7	18.4

過去 1 年間の相手の数も、相手が一人だけは男性の 22%、女性の 29%に留まり、過去 1 年間に 5 人以上という多数の相手を持つ人が男性の 24%、女性の 16%も存在した。

コンドーム使用状況

表10. コンドーム使用状況（彼/彼女）

	男性 n=164	女性 n=158
毎回使用	14.6	12.0
使用する方が多い	18.9	16.5
半々	11.0	18.4
使用しない方が多い	15.9	22.8
全く使用しない	17.1	8.2
覚えていない	4.9	1.9
彼氏/彼女がいない	6.7	3.8
無記入	11.0	16.5

過去 1 年間のコンドームの使用状況は、「毎回使用者」は男性の 15%、女性の 12%と低率であった。最も多いのは男性では、「使用する方が多かった」で 19%、女子では「使用しない方が多かった」で 23%であり、女子の方が使用しない方にシフトしていた。全般的にコンドームの使用は不完全であった。（＊：これまで我々が集めた若者集団のデータの中で最も常用率が低い。）

一番最近のセックス時のコンドーム使用状況

男性の 45.1%（74/164 人）、女性の 38.6%（61/158 人）が一番最近のセックスのときにコンドームを使用していた。

相手の数とコンドーム使用率との関係

表11．相手の数とコンドーム使用率との関係

		過去1年常用率 %	直近使用率 %
1人	n=64	21.9	48.4
2-4人	n=56	14.3	48.2
5人以上	n=202	10.4	38.1

これまでの相手の数が多い人程、過去 1 年間のコンドーム常用率も、一番最近のセックス時のコンドーム使用率も低くなり、無防備な性行動をとっていることが示された。これは他の若者集団と共通する知見であった。

欲しい情報・サービス

表12. 欲しい情報およびサービス

	男性 n=169		女性 n=173
ｴｲｽﾞ流行状況	42.0	ﾋﾟﾙについて	36.4
STDの流行状況	41.4	STDの症状	36.4
STDの症状	40.8	STDの治療法と値段	29.5
STDの治療法と値段	35.5	性病放置でどうなるか	27.2
ｴｲｽﾞ症状	34.9	ｴｲｽﾞ症状	25.4
性病放置でどうなるか	33.7	受けやすいSTD検査治療の場所	24.3
ｴｲｽﾞ最新治療法	31.4	外だしの問題点	23.7
STDの検査方法	29.6	STDの検査方法	22.0
ﾋﾟﾙについて	28.4	ｴｲｽﾞ検査ができる場所	20.8
ｺﾝﾄﾞｰﾑについて	26.6	ｺﾝﾄﾞｰﾑについて	20.2
外だしの問題点	26.0	STDの流行状況	19.7
ｴｲｽﾞ検査ができる場所	23.7	ｴｲｽﾞ流行状況	19.7
受けやすいSTD検査治療の場所	18.9	ｴｲｽﾞ最新治療法	17.3
STD電話相談	17.2	STD電話相談	14.5
ｴｲｽﾞ電話相談	16.0	ｴｲｽﾞ電話相談	6.9
その他	3.6	その他	1.7
不明	17.2	不明	24.3

今回の調査参加者が欲しい情報・サービスは男女で異なっていた。男性では、最も要望の高かった「エイズ流行状況」に関する情報だったのに対し、女性で最も要望の高かったものは「ピルについて」の情報であった。男女とも同様に希望の高かったものは「STD の症状」「STD の治療法と値段」「STD を放置するとどうなるか」であり、STD に関する基礎情報を求めていることが示唆されたが、情報源としては必ずしも「電話相談」を求めていない可能性が示唆された。

『世界エイズデー』『レッドリボン』の認知度

保健行政担当者/HIV 関係者は通常、世界エイズデー前後に胸にレッドリボンをつけてキャンペーンを行うが、果たして、これらの認知度はどれくらいなのであろうか？まず、『世界エイズデー』は、調査に参加した男性の 39.1%、女性の 37.6%と約 4 割弱が認知していた。それに対し、『レッドリボン』は、男性の 14.8%、女性の 16.8%に留まり、以前、政府が行った野球選手や他のスポーツ選手の胸にレッドリボンをつけるというキャンペーンは今回の若者層には届いていないようである。

『関連 NGO』の認知度

今回のイベントを実際に企画実施した NGO の認知度を調べた。参加男性の 11.8%、女性の 13.9%と 1 割強の認知度であった。

●クラミジア抗原検査

検査参加者数及び検査率:2 日間でのクラミジア抗原検査受検者総数は 129 人(男性 92 人、女性 37 人）であった。1 日目は、クラミジア抗原検査率は男性 10.5%（58/554 人)、女性 4.9%（18/369 人）で、2 日目は男性 6.5%（34/525 人)、女性 5.4%（19/350 人）であった。クラミジア抗原検査受検率は両日とも 1 割未満と低率であった。特に女性の参加が少なかったが、これは、検体の採取法（膣スワブ法）に対する抵抗があったためと考えられる。